



願いの記 ～ 語り継ぐ、あの日、あの場所で ～

— 元陸軍船舶特別幹部候補生・橋本国光さん（98歳）の証言 —

今年で終戦から81年。町へ一通の手記が届けられました。これは、御年100歳を目前にした一人の元陸軍船舶特別幹部候補生が、ご家族や親族に向けて綴ったものでした。手記には、終戦間際の広島で被爆し、地獄を生き抜いた壮絶な体験と二度と惨禍を繰り返してはならないという切なる願いが込められていました。

町では、この「願いの記」を執筆された橋本国光さん（98歳）にお話を伺いました。当時の様子や、今の若い世代がこれから核兵器や戦争というテーマとどう向き合っていくべきか。本記事を通じて、「遠い歴史」が「自分たちの町に住む、身近な方の歴史」として捉え直され、平和について考えるきっかけとなれば幸いです。



お話を伺った橋本国光さん（鷹巣在住・98歳）

手記は、昨年（2025年）の戦後80年の節目に執筆され、橋本さんは、兄弟2人が戦争の犠牲になったことから、一人でも多くの方に戦時中の体験、戦争と核兵器の根絶を訴え続けたいと語ります。

— なぜ今、筆を執ったのか

「戦後80年という節目を迎え、広島の状態を直接体験した者として、二度とあのような悲劇を繰り返してはならない。その想いを、次の世代へどうしても伝えておきたいと考えました」と橋本さんは静かに語ります。

— 広島で被爆した経緯

橋本さんは昭和19年9月、陸軍船舶特別幹部候補の第2期生（特攻兵の養成）に志願しました。四国での教育を経て、昭和20年1月から山口県徳山市の部隊へ転属しましたが、広島での特攻訓練中に法定伝染病（A型パラチフス）に罹患し、病院へ入院した状態で原子爆弾投下の日を迎えました。

— あの日、広島で何を見たのか

【被爆の朝】 昭和20年8月6日の朝。病室のベッドから下りていた瞬間、凄まじい閃光と爆風が走り、窓ガラスは粉々になりました。病院は、助けを求める負傷者であふれかえりました。全身の皮膚が剥がれ落ち、幽霊のような姿で「水をください」と叫びながら息絶えていく人々。当時、伝染病を患い身体の自由が利かなかった橋本さんは、地獄のような光景をただ見守るしかなかったといいます。

【帰郷の苦難】 8月15日、玉音放送で敗戦を知りました。軍服も靴もない中、病院の白衣にトイレの下駄履きという姿で故郷を目指しました。焼け野原の広島を歩き、混乱する大阪駅を抜け、故郷へ。多くの肉親や家を失った被災児たちとすれ違いながらの帰路は、あまりに過酷なものでした。



病院での橋本さん

夜トイレに起きると廊下は負傷者と亡骸で溢れていたという。

— 若者を追い詰めた「特攻」という現実

当時、橋本さんは「陸軍船舶特別幹部候補生」として、特攻兵の養成訓練を受けていました。ベニヤ板製の特殊艇で敵艦に体当たりをする「マル・レ作戦」など、国のための死を疑わなかった当時の若者たち。その過酷な訓練の実態は、現代の私たちに平和の尊さをあらためて問いかけます。



戦時中の橋本さん

戦争当時は、誰もが国のために死ぬのは当たり前と信じて疑わなかったといいます。

— 未来へのメッセージ

インタビューの結び、橋本さんは力強く語ってくださいました。「原爆の体験は、一生忘れることができません。二度と戦争を起こしてはならない。平和を願い、社会全体の幸せを考えてほしい。戦争は、絶対にあってはならないのです。」橋本さんが命をかけて語り継ぐ『戦争は絶対に起こしてはならない』という言葉。その重みを、今、私たち自身がしっかりと受け継いでいかなければなりません。

8月6・9日の「原爆の日」、そして15日は「戦没者を追悼し平和を祈念する日」を迎えるにあたり、戦争で犠牲になられたすべての方々に心から哀悼の意を表します。

※三春町では、悲惨な歴史を繰り返さないように昭和60年10月26日に「三春町核兵器廃絶町宣言」を行っています。